

# チカーノ、チカーナの人たちの故郷、アストラノ

—— ニューメキシコのスパングリッシュの響き

林 康 次

## 序 トクヴィルの二重性からチカーノ文学へ

アメリカの民主政治を考える際の拠り所のひとつがA・トクヴィル(1805~59)の政治思想であろう。だが、山内昌之が喝破したように<sup>(1)</sup>トクヴィルが「あらゆる点を勘案しても、この世でマホメットの宗教ほど、人間にとって忌まわしい宗教はほとんどない」と述べてしまった言葉に西欧知識人のほとんど免れることのない限界を私たちは見出す。名著『アメリカの民主政治』にも潜む彼の二重性は西欧資本主義とその近代性を自明のものとして肯定してしまう態度に由来する。民主政治は一体誰のためのものであろうか。

チカーノのアストラノをめぐるスパングリッシュの世界を求める私たちの南北アメリカ論を反省と自戒の方向から始めてみよう。まずは、1831年から翌年の北米調査後、35年に第一巻、40年に第二巻が出版された、『アメリカの民主政治』<sup>(2)</sup>からトクヴィル思想の功罪を再吟味し、次に、本論で詳述する現代チカーノ文学の担い手、アナーヤとバカの〈故郷〉探求論の橋渡しとして、南北アメリカ論を展開する枠組を呈示してみたい。

卓越した政治思想家トクヴィルは観察に鋭いフランス知性を重ね、アメリカ連邦を支配している「普遍的な運動」たる進歩のなかにアメリカ人の魂の「不安動揺」(中巻、483頁)を見る。この彼の洞察はアメリカ人の不安動揺が〈自由〉をではなく、物質的幸福のみを求めるところを発見しているのだ。豊かさのなかの不幸のメカニズムを彼は分析する。

民主的民族では、人々はある平等をたやすく獲得する。ところが彼等は、自分たちが願っている平等を達成することはできないであろう。そのような平等は、彼等の前から、日々後退してゆく。けれども、それは彼等の眼から、決して逃れることはできないであろう。そしてそれは後退しながら人々をひきつけ、それを追求させるようにするのであろう。人々は絶えず、この平等をとらえそうになっていると信じている。けれどもその平等は、彼等にしっかりとらえられるたびごとに、絶えずすりぬけて逃げ去ってしまう。(中略)

民主国の住民たちが、豊かさの中でしばしば遭遇している特異な憂鬱と、時として安楽で平穏な生活のうちで、彼等をとらえる生活の倦怠とは、これらの原因に帰せられねばならない。(下巻、250-1頁)

トクヴィルの洞察は、1856年初版の『アンシアン・レジームと革命』<sup>(3)</sup>では、豊かさのなかの不幸を〈独裁制の本質〉としてとらえるところにも示される。「どんな犠牲を払っても裕福になりたいという欲望・事業欲・獲得欲・福祉と物質的享楽との追求」は「共通の情熱」となり(90頁)、それは自由への好みではない。なぜならば、「真の自由愛」とは物質的な幸福だけを目的として生じてはいない。

すべての時代において、若干の人々の心を非常に強く自由に執着させているものは、自由の物質的恩恵とは別に、自由の引力、自由の魅力そのものである。それは神と法との唯

(1) 山内昌之『イスラームとアメリカ』、中公文庫、1998

(2) A・トクヴィル『アメリカの民主政治』(上、中、

下)井伊玄太郎訳、講談社学術文庫、1987

(3) A・トクヴィル『アンシアン・レジームと革命』、井伊訳、講談社学術文庫、1997

一の支配の下において、何の拘束をも受けずに話し、行動し、呼吸することのできる楽しさである。自由のうちで自由以外のものごとを求める者は、隷従するためにつくられている者である。

若干の民族は、あらゆる種類の危険と災禍とを通じて自由を執拗に追求している。そのとき、これらの民族が自由において愛しているものは、自由が彼等に与える物質的幸福ではない。彼等は、自由それ自体を非常に貴重な、非常に必要な善なるものとして考えている。(中略)他の諸民族は、自分たちの物質的繁栄のうちで、自由に倦みつかれている。彼等は、自由の恩恵として与えられている物質的福祉を努力によって危うくしないかを恐れて、何の抵抗をも示さずに、自由を手放して平気なのである。自由にとどまるために、これらの民族に欠けているものは何であろうか。それは、自由であることへの好みである。(369-370頁)

ここにキリスト教社会たるフランスがアンシャン・レジームから大革命への歴史を動かした根源の力としての〈自由〉を求め、自由の引力、魅力を語りつつ、その自由と切り離しえないキリスト教社会とは相容れない独裁制を排すトクヴィル思想の根本を見出すことができよう。自由の精神を発揮しえたフランス社会と金の独裁制に拘泥しているアメリカ社会との対比のなかでフランス革命の真の意味を問うトクヴィルの姿は私たちに幸福のなかの不幸に陥っているアメリカ像を呈示し、説得する。

だが、南北アメリカ論の立場からトクヴィルの自由とは相容れない北米の物質的幸福への情熱の発見を考えると、彼の視野はあくまでも大西洋システムに沿ったものであり、その死角は南北アメリカを十全に洞察することを妨げていたことが了解されるであろう。これはイスラーム文化を見透せなかった彼の思想的盲点にもつながる。スペインとポルトガルによる南米支配が現在のところ内乱と独裁政治により停止し、人々は自らの運命を改善する意欲を失っているとトクヴィルは嘆く。

けれども、いつまでもそうであることはできないであろう。ヨーロッパも、放任されていても自らの努力によって、中世の闇からぬけ出すことができたのである。南米もヨーロッパも同様に、キリスト教化されている。南米もヨーロッパの法律と慣習とをもっている。南米は、ヨーロッパ諸国民と、その若芽のような子孫たちとのうちに、発展している文明のすべての芽を含んでいる。南米は、われわれヨーロッパ人より以上のもの、われわれの示している事例以上のものをもっている。それなのに、どうしてそれは常に野蛮のままに、とどまっているのであろうか。

この点では、明らかに時が重要な条件となっている。いうまでもなく、南米人たちはおそかれはやかれ、繁栄し開化した諸国民になるときもくるであろう。(中巻、484頁)

洞察と盲点の同居するトクヴィル思想に安住している限り、私たちはアメリカ一國主義を超えることはできないだろう。彼が観察した19世紀前半の北アメリカはサンタフェ街道を開き、メキシコとの戦争に突入し、メキシコの領土の半分を侵略したのだった。トクヴィルはアメリカ連邦憲法の問題を称え、メキシコの野蛮をやはり嘆くのである。

メキシコの住民たちは、連邦制度を樹立したがっているが、自らの隣人たるイギリス系アメリカ人の連邦憲法をモデルとしてとりあげ、これを殆ど全くまる写ししている。けれども彼等は法律の文字を移植したが、法文に活力を与えている精神を同時にとりいれることができなかつた。それ故に彼等は自らの二重政府の機構の中で絶えずもがき苦しんでいる。諸州の主権と連邦主義とは、憲法が規定している範囲から外に出て、常にお互いの範囲に侵入している。メキシコは現実的にも絶えず無政府状態から軍事的独裁に、軍事的独裁から無政府状態に、ひきいれられている。(上巻、321-2頁)

メキシコの制度と現実へのトクヴィルのまなざしとイスラーム文化圏へのそれは同根であった。西欧と資本主義の近代の視点からのみではメキシコの侵略され、歪められた歴史は捉えることはできない。そこで、西欧資本主義近代のまなざしと異質の価値観をもったまなざしを学ぶ必要が9-11以降の21世紀世界構築に要請される訳だ。以下、メキシコ系アメリカ人作家ルドルフォ・アナヤ(1937-)の1992年から2005年に至る〈アルブルケルケ〉五連作<sup>(4)</sup>、そのなかに〈四季〉四部作が含まれるが、彼の作品群の読者へのメッセージを読んでみることにする。

- (一) 1880年春、鉄道がニューメキシコのアルブルケルケの町に達した。伝説によれば、アングロの駅長が「アルブル」の最初の「r」を発音できなかったので、駅の看板を作る時その「r」を落したそうだ。本小説は元の綴り、アルブルケルケを復活させている。(『アルブルケルケ』, 1992)
- (二) 太陽の旅路を歩み、最近の烈しい時代ですら魂の透明性を保つことが可能であることを我々に思い起こさせる古い時代の人々に献げる。同時に、わが母、アナ・オシンスキー、レイチェル・ローレス、わが妻パトリシア、そしてウルティマの霊に感謝する。この女性たちは「朝日の夫婦」がもたらす光の道を歩むよう私を鼓舞してきた人々だからである。(『シアの夏』, 1995)
- (三) 飛ぶのにさまざまな仕方があると昔の人々は我々に教えた。そこで私は諸君に言う。私は夢のなかで飛ぶ、愛のなかで飛ぶ、朝日の夫婦の光がわが魂を明るさで充たす時朝日のなかを飛ぶ、私は美のなかを飛ぶ、わが愛する土地、人々、私の全てである音、目にする

もの、匂いなど美のなかを飛ぶ。わが道を歩むのを助けてくれた人々全てに本書を献ぐ。

(『リオ・グランデの秋』, 1996)

- (四) 自分たちの夢を／ニューメキシコにもたらした／先祖たちに献ぐ(『シャーマンの冬』, 1999)
- (五) 『ヘメスの春』はソニーの四季をめぐる冒険の完結編である。四部作の完成を待って下さっていた全ての忠実なる読者に本書を献げる。愛の抱擁をもって。(『ヘメスの春』, 2005)

太陽の道の教えに照らした過去と現在のあるべき歴史の連続を読者に説くアナヤ文学のエッセンスは以上の献辞から察せられよう。一言で云うと、アナヤ文学は近代への挑戦と1989年の冷戦終結以降の世界再編への提言に存在意義がある。トクヴィルの政治思想の根拠はアナヤ文学のなかで問題化されていくのである。

西欧の〈精神〉と別の価値をもつ中南米とニューメキシコの〈野蛮〉の世界で、例えば、「孤独」の問題は、西欧ロマンティシズム発の内面の問題とはなりえない。太陽の道からそれることと太陽の道を奪うこと、この二つの状況が人々に〈孤独〉を招来させるといったアナヤの世界は「普遍主義・論理主義・客観主義を原理とする〈北型〉ヨーロッパの文化」の強い理性<sup>(5)</sup>と烈しく摩擦する世界なのである。イタリアのタブッキの描く弁護士の言葉「何よりもりまず一人の人間なのです」はアナヤ的世界のものだ。

もう一人、若い世代のチカーノ詩人ジミー・サンティアゴ・バカ(1952-)の証言に触れておこう。1980年代から60年代アメリカ、10代の頃を回顧する詩人バカ／マルティンは1960年代の風景をうたうが決して孤独の内面の吐露ではないのだ。

(4) Rudolfo Anaya, *Albuquerque*, 1992, *Zia Summer*, 1995, *Rio Grande Fall*, 1996, *Shaman Winter*, 1999 以上 Warner Books Edition による; *Jemez Spring*, 2005, Univ. of New Mexico Press (以下本論では、廣瀬典生訳『アルバカーキ』, 大阪教育図書, 1998年を拝借させて頂いている。)

(5) ファビオ・ランベリ『イタリア的思考方——日本人のためのイタリア入門』, ちくま新書, 1997; アントニオ・タブッキ『ダマセーノ・モンティロの失われた首』, 草皆伸子訳, 白水社, 1999

ティーンエイジの年月  
 ぼくはあの暗いむすびつきを探した  
 行動となった言葉の、現実となった夢の、  
 たとえばティヘリーナによる裁判所の襲撃、  
 あるいはセサル・チャベスと何千人ものブラ  
 セーロたちが  
 行進するかれらを叩きのめす  
 警官どもの打撃に血まみれで耐える姿。

ぼくはダウントウンの店をまわり  
 友達のみんなにやるための冬物のコートを略  
 奪した。  
 そして州兵からは催涙ガスをくらった、  
 ルーズベルト公園でぼくらが  
 警察の車を燃やしたとき。  
 やつが一人のチカーノを、口答えしたといっ  
 て警棒で殴ったからだ<sup>(6)</sup>。

1950年代アメリカに端を発した黒人公民権運  
 動に呼応していったチカーノ運動のうちに私たち  
 は苦悩から希望への決意を読み取らねばならない。  
 その希望への表明はアナーヤの場合最新作『ヘメ  
 スの春』で、バカの場合前掲部分に続く詩作でそ  
 れぞれなされる。これに関しては〈春〉の意味と  
 して本論で扱うので、本序では、その〈春〉に先  
 立つ苦悩を簡潔に述べるにとどめよう。

マニュエル・G・ゴンサレス『メキシコ系米  
 国人移民の歴史』<sup>(7)</sup>によれば、1965年～1975年のチ  
 カーノ運動には、メキシコ系米国人世代からチカー  
 ノ世代に深く根ざした指導者が活躍していた。彼  
 等の仕事は文学面でのアナーヤからバカのスパン  
 グリッシュ (Spanglish) の流れと呼応し、ジョ  
 ンソン政権以降の北の力とブラウンパワーとの闘  
 いのうちに両者の価値観は烈しく衝突する。

セサル・チャベス (1927-93) と同世代のR・  
 L・ティヘリーナ (1926-) は、南西部の「インド・  
 イスパーノス」の抱える問題を世襲財産の喪失に  
 由来すると信じていた。売却によって譲渡された

土地でさえ、グアダルルーペ・イダルゴ条約下では、  
 不法に奪われた土地に対しては米国の裁判制度を  
 通じて、賠償を勝ち取るためメキシカンは団結せ  
 ねばと彼は結論づけた。奪われた授与地を取り戻  
 すことは、さらに「もっと野心的で夢想的な計画」、  
 即ち、ニューメキシコ北部に樹立予定の独立国  
 「チャマ共和国 (Republic of Chama)」なる自由  
 都市国家創設の序曲となる筈であった。だが、相  
 手にしない政府へのティヘリーナの手段は次第に過  
 激になり、1967年6月、拘留中の「アリアンサ」  
 の仲間を解放し、地元の地区検事を市民逮捕すべ  
 く、リオ・アリバ郡庁所在地のティエラ・アマリ  
 ジャにある郡庁舎に支持者らと共に侵入した。銃  
 撃戦の末、アリアンサの脱出した成員を逮捕する  
 ニューメキシコ史上最大の捜索が行われ、ティヘ  
 リナの「ニューメキシコの貧しいイスパーノ共同  
 体の惨状を誇張して表現した」計画は挫折した。

ロドルフォ・ゴンサレス (1929-) の場合は、  
 ティヘリーナやチャベスと違い、メキシカン社会の  
 将来は都市地域にあり、若者に重点を置いていた。  
 そのために、彼はメキシカン社会を団結させる  
 「正義のための運動」なる組織を設立し、若者が  
 抱える問題を中心に文化的ナショナリズムを展開  
 した。彼は、メシカ (Mexica) という架空の祖  
 国アストランは「占領されたアメリカ」と呼ばれ  
 る南西部で見つかる筈だという考え方を擁護する  
 中心人物となっていく。「正義のための運動」は  
 ティヘリーナの計画より一歩進んで、チカーノた  
 ちに対して先祖の土地を返還することを求め、1968  
 年の首都ワシントンにおけるキング博士の「貧者  
 の行進」ではゴンサレスはティヘリーナと共にチカー  
 ノ代表団の指揮にあたった。

更に、翌年、彼は、1969年3月27日～31日デン  
 バーで開催される、バリオ在住の若者による全米  
 大会「チカーノ青年解放戦線」の発起人となった。  
 1500人以上のチカーノが集まり、チカーノの独立  
 した祖国を求める叫び、「アステラン精神宣言」  
 (Spiritual Plan of Aztlán) が公表され、チカー

(6) 管啓次郎「チカーノ・アパッチの肖像 ジミー・  
 サンティアゴ・バカ」112-136、『コヨーテ読書』、  
 青土社、2003

(7) マニュエル・G・ゴンサレス『メキシコ系米国人・  
 移民の歴史』、中川正紀訳、明石書店、2003

ノの独立政党の結成が計画されたのがこの大会においてであった。

こうした盛上のなかからチカーノ世代のホセ・アンヘル・グティエレス（1944-）は同年、1969年ウィンター・ガーデン計画を開始した。それは、クリスタルシティを中心とするリオ・グランデ河沿いの十郡から成る地域におけるメキシカンの政治権力を最大限に強化する目的で、フォード財団が資金助成する運動であった。1970年代には彼自身も公職に就き、クリスタルのメキシカンの発言権は大きくなっていった。

以上、南北アメリカをめぐる、トクヴィルの政治思想からチカーノの人々の夢と行動に眼を移しただけでも、前者の空疎にチカーノルネサンスの風土が醸成されていく様子が予想されよう。

さて、本論では、アナーヤの自伝的四部作の締め『アルブルケケ』における現代アルバカーキと〈春〉の到来を第一節で、第二節で、ソニーの冒険四部作の締め『ヘメスの春』を中心に〈春〉の意味を考えてみたい。

## I 現代アルバカーキにおける〈春〉の到来

ジョン・ロック（1632-1704）の「初めは、全世界はアメリカであった」とするアメリカ像<sup>(8)</sup>にもかかわらず、南北アメリカはヨーロッパによる侵略と編入の歴史舞台となっていった。アナーヤの自伝的四部作及びソニーを主人公とする四季四部作はスペインと合州国の征服の跡と失われたコスモロジーを正確に語り、喪失と回復を歴史の問題とする。

『アストランの心』（1976）で<sup>(9)</sup>、アナーヤは〈青〉の信仰を行動に移そうとするクレメンテ・チャベスにニューメキシコの長き冬の時代を闘い抜かせた。その20年後、『アルブルケケ』（1992）で、クレメンテの子、作家ベンは現代アルバカーキで二人の若者による〈春〉の到来を見

届ける。その〈春〉に登場した探偵ソニーは二人の若者の行動を受け、〈夏〉から翌年の〈春〉にかけて、現代アルバカーキと過去のアルブルケケを夢と行動で結びつけようとする。ソニーの四季をめぐる冒険は歴史を遡行することにより自己の家族史とニューメキシコ史を現代アメリカによみがえさせるのである。

この点、ソニーのコスモロジカルな生き方は『アルブルケケ』に登場するフランク・ドミニクとウォルター・ジョンソンのそれと区別しなければならない。以下、Iでは、二人の若者の行動を通して、カリフォルニア州のオーエンス・ヴァレーの〈水〉戦争との対比で、アナーヤの水思想を述べる。IIでは、『アルブルケケ』の作家チャベスと『ヘメスの春』の探偵の意味を探っていく。その際、〈春〉をめぐるアナーヤと若い世代の詩人バカとの間に継承と差異が問題となる。

『アルブルケケ』の物語は作家ベンと二人の若者、アブラン・ゴンザレスとその親友ジョー（ホセ）・カラバサの出会いから始まり、二人の成長を見届け、作家自らも新たな人生への決意を固めたところで閉じられ、作品自体も1995年から開始されるソニー四部作に引継がれていく。1996年に発表された『ハラマンタ 砂漠からのメッセージ』<sup>(10)</sup>の次の一節はアブランとジョーの苦悩を表現している。

愛が魂の窓を開く時罪深いものは何ひとつない。中心は愛と表現される。互いに感じるものが愛なのだ。恋人が相手という時孤独であることをなくすように、恋人が他の者との精神的な結びつきのなかで孤独をなくすことを学ぶものだ。その情熱的な合体はより高次の意識を創造し、人間性の道を創造する。  
(150頁)

物質的な世の中、精神が傲慢になり、地球への暴力と破壊の時代、『ハラマンタ』なるアレゴリ

(8) John Locke, *Treatise of Civil Government and A Letter Concerning Toleration*, New York, 1965

(9) Anaya, *Heart of Aztlán*, 1976, Univ. of New

Mexico Press

(10) Anaya, *Jalamanta A Message from the Desert*, 1996, Warner Books

カルな作品のなかで、作者は「人間性の道」、「太陽の道」開示のうちに、〈孤独〉の克服を説く。この文脈で、アブランは父親を求め、ジョーはプエブロの水回復を求め、アイデンティティを見定めようとしている。歴史が課した孤独に苛まれている二人は歴史を見極めようとする。二人の〈孤独〉は――

「おまえさんの母さんは死にかけている。その代わりに、おまえさんは新しく生まれようとしているのさ」ばあさんのこの言葉を聞いて背筋がぞっとした。

「本当のことを知りたかったら、うちへおいで」

「本当のこと？」

「トゥ・エレス・トゥ？」こう言って、ばあさんは細い指をアブランの方に突き出した。そして身をひるがえしてどこかへ消えてしまった。長く尾を引く泣き声がアブランを包む闇に響き渡り、またもや血が凍る思いに襲われた。

「トゥレスばあさん！」アブランは叫んだ。あの狂ったばあさん、いったい何を言いたかったんだろう？トゥ・エレス・トゥ？確かにそう聞こえた。おまえさんはおまえさんってことか？(41頁)

しかし、どう言われようと、ジョーにとって、二つの命が混ざり合った自分の人生は充実したものだった。じいさんが生きていたときは、とくにそうだった。

おまえは特別だ。じいさんはジョーによくそう言っていた。ジョーを村のリーダー格の男、一人前の男に育てたのは、じいさんだった。アルバカーキへ行って、いくつかのバリオで野菜を売って回るとき、必ずジョーを連れていった。白人のやり方を覚えておくんぞ、うかうかしていると、こっちがやられてしまうからな、と教え込んだ。リオグランデ

川沿いに住む人たちのこと、プエブロの歴史、どうやってスペイン人がやってきて、その後どうやってアングロが入り込んできたかを話して聞かせた。やつらは土地と水が欲しかったんだ、それだけのことなんだ。土地はぜったいに手放すな、サントドミンゴの男としての誇りを持つんだ。これがじいさんのジョーへの忠告だった。(84頁)

二人の孤独の超克の契機は、アブランの場合、「トゥ・エレス・トゥ」(お前さんはお前)の実現、ジョーの場合、サントドミンゴの男としての誇りの貫徹にあった。彼らのアイデンティティ確立の旅が1969年のデンバー会議で表明された「精神の計画、アストララン」を踏まえたチカーノという太陽の民のナショナリズムの主張である故に大変な困難を伴うのは予想できよう。

この点から、1860年代から1980年代に至る130年に及んだオーエンズ・ヴァレーの水戦争と二人の問題を並置してみることにする。カリフォルニア州、インヨー郡(Inyo County)のオーエンズ・ヴァレーと大都市ロサンゼルス間で繰り広げられた水戦争の歴史は、ジョン・ウォルトン<sup>(11)</sup>に従えば、三期に分けることができる。

第一期は1860-1900年、拡張国家の時代、第二期は1930年まで、進歩的国家の時代、第三期は1980年代まで、福祉国家の時代の三期にわたり国家と文化との間で〈水〉をめぐる闘争が合州国主導で行われた。(チカーノの文化的ナショナリズムの発想ではなく、国内的な都市と農村という二項対立のなかで展開した。)各々の時期、国家と文化との間でなされた水戦争は、ポピュリスト、進歩派、環境主義の各時期のイデオロギーが力となり、集团的行動を鼓舞し、合州国の農本的文化伝統を更新していった。

こうした歴史のなかで、ロサンゼルスとオーエンズ・ヴァレー間の水戦争は敗北から勝利に流れていった訳だが、経済主導の資本主義社会に対する環境運動という社会運動が「オーエンズ・ヴァ

(11) John Walton, *Western Times and Water Wars: State, Culture, and Rebellion in California*, Univ.

of California Press, Berkeley, 1992

レーのモラル経済」の伝統に棹さしていたというウォルトンの指摘はきわめて重要である。

オーエンズ・ヴァレーのモラル経済は明らかに伝統と法の織り交ぜに基礎を置いていた。抗議の品目にはお上への陳情や訴えあるいは昔からの法が含まれていた。こうした努力は典型的な非合法の直接行動に先立っていた。伝統は州の成立や法の諸原理——例えば、自営農地法による入植者の権利あるいは進歩的改革の発展的約束を含む形で喚起され、発明された。モラル経済はティ・ルーズベルトへのレスタ・パーカーの手紙のなかに生き生きと表われた：星条旗にかけて、忠実な民として大統領に訴える 共和国を代表する農本的小地主の価値を擁護し、官僚と仲介勢力の腐敗した取引に反対するよう。(330頁)

ウォルトンが鋭く指摘しているように、水戦争において果たした農本主義の伝統の役割はエコロジー運動の大波によって更に促進されることになっていく。水戦争における三期を支配したイデオロギーがロサンゼルスへの集団行動に方向と力を付与してきた過程で、大都市が優位に立ったが、さすがのロサンゼルスも全米的な環境運動に屈服せざるをえなくなった。この敗北から勝利に移っていた沿岸水利権保護の歴史は目覚しいと言えるであろう。

だが、オーエンズ・バリーとロサンゼルスの水戦争の主演は誰であったのか。征服と編入の歴史、更に、環境運動の美名の下に、オーエンズ・バリーの先住民、パイート族 (Pajute) の存在はどこにいったのか。生態系を破壊したのは誰なのか。この地点から再びチカーノ運動に戻る。アルバカーキという現代でスパングリッシュを響かせる二人の若者は先住性を強調することで自己の文化に参入することの意味を悟っていく。

父親の根を求めるうちに、アブランは恋人ルシダの家族の住む山に赴き、そこに母親シンシアの描く先住民の姿と同一の山の民を発見する。

「けどな、それからが大変だった。案の定、

血の中に入った毒でもうほんとに死んでしまいそうだった。長いあいだ熱が下がらなくて、悪夢にうなされとった。そしたら熊の野郎め、おれに話しかけてきよったんだ。悪夢にうなされとった夜毎に熊の霊がおれに乗り移ってきよってな、夢の中でおれは熊になって、やつらに話しかけとったんだろうな。それで退院してきたとき、熊男と呼ばれるようになってな。おれは昔のおれではなくなったんだ。みんなもそのことに感じいとった。ちょっとのあいだ、自分の馬にも近づけななんだ。馬のやつ、怯えて後ずさりしよってな。

「それからも、おれはあの山に登とった。じっと座り込んで森の音に耳を済ましとった。そしたら、鳥やらリスやらが、おれのほんそばまで寄ってきよる。シマリスは来るし、鹿までが寄ってくる。(中略)

「おれは一人そこに残された。しかし気分はよくってな。つまりだな、おれは仲間になったんだ。ほんとにやつらの世界に入ったんだ。仲間に入れてもらってたんだ。(279頁)

ファン・オソ、熊男と呼ばれるルシダの父親に近代の価値がもたらす〈孤独〉から免れた〈仲間〉の意味をアブランは教えられる。ファン・オソの〈心〉を理解できないアメリカが本当の両親の間の愛を切り離したことを彼は後で知ることになる。そのアメリカがホセをベトナムに駆り立てた。ところが、ホセはベトナムでプエプロの〈心〉を発見する。レーニンやマルクスも聞いたこともないような農民のなかに。

「実は、子供のころ、ヘメスの山に鹿狩りに行ったとき、親父が歌を教えてくれたんだ。鹿に歌ってやる歌でな。そうなんだ、それだったんだ。引き金から手を放して、その歌を歌い始めたんだ、ほんとにつぶやくようにさ。その年寄りは見上げて、おれに殺されていたかもしれないと気づいたんだ。やつは身動き一つしなかった。じいっと聴いていたんだ。『おいでよ鹿よ、われらの兄弟。おまえの命をやっとくれ。おめえの命と引き換えに、

おらの村は生き長らえる。村のじいさん、ばあさんに、おまえの肉をやっとくれ。長くて冷たい冬が来る。おまえの命をやっとくれ』  
「そしたら、やつも歌いだしたんだ、ベトナム語で。死を迎える歌だったんだろう。おれを撃った手応えを感じてただろうし、今度はおれに撃たれる番だと思ったんだろう。(中略)

「おれはライフルを下ろした。やつはびっくりしたみたいだった。おれはそこに突っ立って、溝にライフルを投げ込んだ。殺せなかったんだ。殺すなんてことは間違いだ。やつは鹿じゃないんだからな。人間なんだ。プエブロに住む年寄りと同じなんだ。やつらも自分の村を守ってるんだ。おれたちは向かい合っただけでじっと立っていた。そしたら、やつはそっと会釈して、茂みの中へ消えていったんだ。  
「(中略) 殺し合いは終わったんだ。もう二度とこの茂みに足を踏み入れることはないだろう。おれは意識を失いかけていた、けど頭ははっきりしてたんだ。やつはチャーマンだったんだ。おれを悪夢から引っ張りだしてくれたんだ。おれを目覚めさせるために、撃たなければならなかったんだ。農夫には土を耕すための強い腕が要るんだってことを思い出させるためにな。(89-90頁)

ヘメスの山とベトナムのジャングルで学んだ文化を行動に移す時ホセは水戦争の渦中に飛びこむ。それはアルブルケルケをアルバカーキに、新しい町に、新しいエルドラドにするドミニクの幻影を打ち破る〈夢〉であった。

「われわれは、『リオグランデ<sup>R</sup>観光開発会社<sup>G</sup>』をつくり、主要な件は既に交渉済みであります。川沿いのプエブロは、どこも契約書を手にはしています。水売って、ドミニクさんがすでにおっしゃいました収益金の一部を受け取るというものです。皆さんに納得していた

だけとおもいますが、リオグランデ川上流で細々と営まれている農業は、もう時代遅れです。地元インディアンの皆さんが、少しばかりの作物を育てるのに必要なだけの水は確保できます。しかしRGE計画に加わることでこそが、長期的に利益を得る確かな方法なのです。」

聴衆の中にいるヒスパニックがたじろいだ。払い下げ地の水利権を放棄することなど、考えられない。インディアンが自分たちの水を売るなんて、まったくばかげている。しかしドミニクには、インディアンはみんな売り渡してしまうとの自信があるらしい。(206頁)

アブランとホセが現代アルバカーキの〈悪〉に自己の〈夢〉を対峙させ、苦闘しているのは、後に、ソニーが〈キツネとカラス〉との対決を強いられるのは、彼らが〈ドミニクなるもの〉に宇宙における自己という大切なものの危機を感じとっているからである。

〈ドミニク〉は1969年の「精神の計画、アストラン」(El Plan Espiritual de Aztlán)<sup>(12)</sup>に盛り込まれたチカーノ運動の〈精神〉と正反対の計画を目論んでいたのだ。〈アストランの計画〉は以下のように要約できる。

新たな国民、その誇るに足る歴史的遺産だけでなく、我々の領土への残忍なる「グリーンゴ」(英米人)の侵略をも意識している国民の精神から、「我々」は、自分たちの誕生の地の返還を要求し、我々太陽の民の決意を神聖視した我々の祖先が出来た北の地アストランのチカーノの住民と開拓者は、我々の血が要求するものは我々の力、我々の責任、そして我々の避けることのできない運命を宣言する。

我々は、わが家、わが土地、わが額の汗により、また、わが心によって正当に要求される仕事を自由に独立して決定する。アストラ

(12) Anaya & F. Lomeleí (ed), "El Plan Espiritual de Aztlán," *Aztlán Essays on the Chicano*

*Homeland*, Univ. of New Mexico Press, 1989



ンは種をまき、畑に水をやり、作物を収める者に属するのであって、外国のヨーロッパ人のものではない。我々は褐色の大地に勝手な開拓地を認めない。

兄弟たることが我々を団結させ、兄弟愛ゆえに時機がやってきて、我々の富を略奪し、我々の文化を破壊する外国人「フランス人」と闘う国民となるのだ。わが両手に心をしっかりもち、土にわが両手をつっこみ、我々はわが混血の国の独立を宣言する。我々はブロンズの文化をもったブロンズの国民である。世界を前にして、北アメリカのすべてを前にして、ブロンズの大陸のすべての兄弟を前にして、我々は国民であり、我々は自由プエブロ連合であり、我々は「アストラン」だ。

チカーノの独立と自決を宣言した前文の後に、プログラム、ナショナリズム、組織としての目標が掲げられる。目標には、(一) 団結 (二) 経済 (三) 教育 (四) 制度 (五) 自衛 (六) 文化的価値 (七) 政治的自由が挙げられ、その目標を行動に移す細目が述べられ、最後に以下の言葉で結ばれる。

「アストランの計画は解放の計画だ！」

ドミニクの資本主義的な計画に対し被征服者の側から黄金に憑かれた人々の幻影の空しさを暴くホセとアブランを登場させた作者の意図は明白だ。アナーヤ的発想(アストラン計画を踏まえた)からすれば、オーエンズ・ヴァレー水戦争は1970年の「地球の日」を境に環境運動に呑み込まれ、漁夫の利を得たようなものだった筈である。川沿い(沿岸)水利権をめぐる都市との水戦争の主役は太陽の下先住民でなければならなかった。

そこでアナーヤは歴史を逆流させ、太陽の運行の下に大地と水との宇宙的ドラマを作品の中心に据えた。その結果、アナーヤの語る宇宙は、オガララ帯水層とフロリダの帯水層の危機的状況下に

ある干上がったアメリカとメキシコの絶望的な水状況を観察した『青い黄金』(2002, 邦訳『水戦争』の世紀)<sup>(13)</sup>の分析と酷似してくる。

マキラドーラの危険な水と貧困に愛想をつかして、母国を去るメキシコの若者があとをたたない。彼等は夜ごと国境へ向かい、よりよい生活を求めてアメリカに密入国しようとする。ティファナやホアレスのような町の六車線道路の先の荒れ地には、夕暮れ時になると男たちがたむろしだす。コンクリートの急斜面の下にヘドロと未処理の下水が流れる水深約六〇センチの川がある。川の向こう岸は、最上部に電流の通った有刺鉄線と投光器をそなえる、垂直なコンクリート壁だ。川のヘドロにまじって、人間と家畜の糞便、使用済みのコンドームや注射針、膨大な生ゴミが悪臭を放っているが、男たちはここを走り抜けないと反対側に渡れない。足と靴はヘドロと汚水にまみれる。アメリカにたどり着くにせよ、国境警備隊に捕まるにせよ、彼等は危険で汚いこの川をとおらざるを得ないのだ。(57-58頁)

グローバルな水危機下、メキシコとアメリカの国境沿いに広がるマキラドーラ(保税加工場地域)やトゥインシティのメキシコ側の都市にみられる水不足という貧しさの対極に水を売買する資本がある。資本に対する若者の闘いには助けてくれる者が沢山いる。ジョーを助けるコヨーテも重要な役割を果たしてくれた。

「さあ出番だ、コヨーテ、助けてくれよ」  
ジョーは祈った。すると、あのトリックスターが現れた。片方に金の鎖のぶらさがった紫のズボン、鮮やかな緑のピロードのシャツ、真っ赤なサスペンダー、サングラス、幅広の麦わらぼうし、そして両足には真新しいインディアンの脚絆チワネといういでたちだ。四〇年代の

(13) モード・バーロウ・トニー・クラーク『「水」戦争の世紀』、鈴木主税訳、集英社新書、2003；山本

純一『メキシコから世界が見える』集英社新書、2004

いかれ者を思わせる。「キーはマットの下にあるぞ、兄弟」狡猾に立ち回るコヨーテの霊が言った。「おまえは、こうするよりほかないからな」

「そのとおり、兄弟」ジョーはうなずいた。「よく分かってるな」(408頁)

コヨーテに話しかけているつもりだ。運転席に上がったが、車の中にはだれもいない。ハンドルに置き手紙が突っ込んであった。

へい、兄弟、やっと答えが見つかったな、後は自分でできるだろ。おれは、デンバーへ行くいかれ者連中と合流するよ。デンバーには、おれのことをいちばんだと思ってる女がいるんだ。それでやつらといっしょに行くことにしたんだ。アルバカーキも、もうおもしろくない町になりそうだしな。昔の戦士はみんな、死んじまったか、監獄へ入ってるかだ。トウモロコシを温めておいてくれよ。この夏、サントドミンゴに立ち寄るかもしれんからな。体を大事にしろよ。

あばよ、コヨーテ(427頁)

コヨーテの霊に助けられ、生のアボリアの答えを見出したジョーは親友がドミニクの奸計でボクシングの試合をしているコンベンションセンターへ向かう。人のさまざまな霊と交感するチカーノの世界で二人の若者は自己のアイデンティティに辿りつくことができた。

## II 〈春〉二作をめぐって——作家と探偵のミステリー

『青い黄金』の出版2002年に先立って、『アルブルケルケ』の三年後、1995年、アナーヤは、『シアの夏』から、メキシコとニューメキシコとを結ぶ四季四部作を開始した。その『シアの夏』の冒頭に、老人と老木を語る印象的な場面がある。キリスト教社会の幸福の追求とは異質の、大地に根ざす大樹と大地の夢を語り継ぐ老人が対話する場面だ。こうした宇宙意識を糧に主人公ソニーは

今後幾度も「大ガラス」と対決することになる。作品半ばでは、癒しの女の治療とスペインのフランシスコ派宣教師の対比のなかで、スペインと合州国支配がもたらした南西部の〈水〉の枯渇が暴かれている。以下原文三頁分を圧縮し抄訳してみる。

ソニーはまぶしくて目を細め遠くを見、その土地と天候を生き延びた女たちはどうしているかいぶかった。インディアンの女たち、遊牧のコマンチ族たちから始め、次にカライとアボのミッションのメキシコ女たち、最後にやつれた顔のオーキーたちに思いを馳せた。水は生存にとって不可欠であった。水なくして燃える土地には生活はありえなかった。生活は風車タンクたるオアシス周辺に集まった。新しい民族毎に土地に幾らか技術を加え、風景を変えるに至った。人間の生活というものは人類が創造する小さなオアシスの範囲だけで存在しえたのである。(中略)人々はオガララ帯水層を吸い尽くしていた。

だからドミニクは危険極まりないとソニーは思った。彼にはバランス、リオ・グランデ河流域の物事の成立ちの上で河と地下水がどのような役割を果たしているのかなどでんでわかっていないのだ。ニューメキシコの人々はドミニクの夢を理解した。なぜなら、高地ニューメキシコ砂漠の人々は熱気と砂を嫌い、オアシスを好んだ。(中略)アラビアの影響はニューメキシコ人の血の奥深くに流れ、立ちこめている。流れる水が楽しげにあふれ出るところが人々を集めるのは生存本能だった。多分ドミニクはメキシコシティのソチミルコの庭園を訪れたのであろう。スペイン人が来る前のその壮麗さを想像したのだろう。交易に運河を静かに行き来する舟がテクスココ湖を上下した。アルブルケルケは新しきソチミルコになる筈だった。アルハンブラ宮殿を見たいとソニーは思った。彼はスペインを探検したかった。(207-9頁)

ソニーはドミニクの水の計画にニューメキシコ

とメキシコとの近親性に注目しながらも、彼の夢の恐ろしさを宇宙の営みに対する共感の欠如の結果の資本の優位に見ていた。ソニーは「己のものと呼べる場」を求めて、風と水からなる風景を注視する。カライのミッションの廃墟や棄てられた農地、そしてオガララ帯水層の水涸れなどはスペインと合州国による聖と俗における支配の末の資源破壊だとソニーは震える。「人間の生活というものとは人類が創造する小さなオアシスの範囲だけで存在しえる」というソニーの宇宙観のバランスはアナヤの自伝的四部作に遡るものである。

『アストランの心』(1976)の詩人クリスピンはそれ以前の人物、『ウルティマ』のアントニオとトルトゥーガを結び、『アルブルケケ』後のソニーにつながる存在である。「私はアストランド！」と叫ぶ詩人はその内実をこううたう。「わが心は大地の心！／私は大地であり私は青空だ！／私は水であり私は風だ！／私は今日語られる伝説のなかを歩き、回り、過去を再創造する・・・／私は立ち止まり、成長する未来の時を与える。／私は像であり、私は生身の人間だ！／私は夢であり、私は現実である・・・」(131頁)

現代アルバカーキの出発点は1880年の春の到来と共にやってきた鉄道の侵入である。作家ベン・チャベスの父クレメンテはクリスピんに導かれ労働運動を指揮する。だが、長い冬の後、真の〈春〉の到来は『アルブルケケ』の二人の若者の登場をもって初めて訪れるのであった。その一端は前節で眺めたので、本節では、〈春〉の到来をめぐる二作『アルブルケケ』の作家ベンと『ヘメスの春』の探偵ソニーを中心に、両者のミステリーとのかかわりに触れてみようと思う。

アナヤ文学におけるミステリーとはスペイン時代ミッション設立と共に押しつけられたカトリシズムとは対極の土着の信仰のあり方と風景との調和世界から喚起されるものである。作家ベンの成長軌跡と行動の探偵の深化の過程にとって『トルトゥーガ』からの次の一節は見逃し難い。トルトゥーガなる山の秘密をカトリックの少女たちではなく、山の民イスメルダが教えてくれる場面だ。

彼女らは、ずっと以前にぼくといっしょに聖体拝領を受けた、初聖体〔最初の聖体拝領、カトリックの少年少女の重要な儀礼〕の少女たちの一群のように歌をうたい、踊っていた……それはぼくがほんの小さな子供だったころのことだ。それからその一人、きらきら輝く目をした黒い髪の少女が、踊りの輪から離れて、こちらに駆けだし、走りながらぼくの名を呼んだ。トルトゥーガ！ああ、あなたが来て、サロモンがお話をしてくれるのを、聞きましょう！その少女はイスメルダで、流れるような純白のドレスを着て、喜びの歌をうたっていた……彼女はぼくの手をとり、ぼくらはいっしょに温かい、泡立つ水の中へと倒れ落ちた。溺れちゃうよ！とぼくは叫んだ。溺れちゃうよ！いいえ、と彼女はいった。この山の水では、溺れることはないのよ。そしてぼくをしっかりと抱きしめながら、彼女はぼくに亀の鱗の使い方を教え、やがてぼくもこのほとぼしる水の中で泳ぐことができるようになった。(中略) ござんなさい、これが山の血よ。ぼくはそちらを見た。それはこれらの泉をうるおす二本の川で、一つは真っ赤な溶岩の熱にぎらぎらと輝く流れ、もう一つは冷たい水の青々とした流れだった。……そして二本の川が合流するところでは、流れはシュウシュウと音をたて、杏の香りのする金色の液体となった。ここで二本の川が出会うのよ、と岸をめざして二人で泳ぎながら、彼女はぼくにささやいた。ここが力の場所。見て！(49頁)

管啓次郎の解説によれば<sup>(14)</sup>、初聖体の白いドレスの少女たちは「一方で純潔という権利によって神の名のもとに自分を排除し処罰する存在、他方ではすでに罪を負う者として肉の誘惑に自分を誘う存在という、正反対の二つの意味を担ったイメージ」として病床のトルトゥーガに迫っていた。しかしこの両義的なイメージを背負うトルトゥーガはやがて疑いのうちに生命そのものの喜びをか

(14) Anaya, *Tortuga*, Univ. of New Mexico Press,

1979, 『トルトゥーガ』, 管啓次郎訳, 平凡社, 1997

けて治療に取り組み、遂には母親が信じるような形でキリスト教の神の存在を否定し、自分の不幸と体の麻痺は何の意味もなく、ただ起こったことだと考え、同様に、何の処罰でもなくただ生命の最も悲惨な状況下のサロモンの存在を正視することで、自分は生命そのものが〈ただ単にそこにあること〉のミステリーをうたい、生命の真の原動力である太陽賛歌のうたい手たらんと決意するに至る。その決意にイスメルダを始めとする多くの女性たちに助けられ、彼は確固たるものに成長してきたのだ。

こうしたトルトゥーガの成長パターンは作家ベンにも探偵ソニーにもあてはまることであった。以下、『アルブルケルケ』から『ヘメスの春』に至る連作をアルバカーキ五部作として二人の成長を辿ってみると次節で扱うバカの自伝詩に相通するニューメキシコの〈春〉の意味が21世紀現代に浮かび上がるだろう。

四方聖なる山々に囲まれた現代アルバカーキはドミニクの支配する物欲の世界で宇宙の神聖を顧みようとはしていない。そこで作者はアルバカーキをアルブルケルケと命名し直す儀式から『アルブルケルケ』を始める。アナーヤ自身「アストラノ：国境なき故郷」<sup>(15)</sup>と題するエッセイで、1969年のチカーノ共同体がアストラノをその故郷と命名したことの意味をこう説明しているのだ。

命名即ち自己定義の儀式は共同体が行う最も重要な行為の一つである。集団を名前でも個別化することは国と同様種族の進化における自覚の根本的段階である。命名は集団の歴史と価値を合体させ、その集団の他集団あるいは国との関係に必要な同一化を付与するが、最も重要なことは、命名の儀式が誇りを回復させ、創造的な方向で際立つ更生したエネルギーを注入することだ。(230頁)

アルブルケルケと再命名した世界で作家ベンは〈孤独〉と対峙する。社会運動家を父にもつベン

ジョンソンの虚偽に対し、ファン・チカスパタスとアル・ベンコ、運命の女神や孤独嬢などの幻影との対話を通して二人の若者の成長を鼓舞する。孤独嬢とのやりとりのミステリーは歴史がニューメキシコに課した〈孤独〉から〈春〉を紡ぐ突破口ともなっている点重要なものである。

ニレの木々が砂地の岸にしがみつ、池には冬苔や藻が繁茂している。それでも頑固に魚を釣っているのだ。肝臓のエサ、心臓のエサ。

ベンはポープの一節を思い起こした。希望は永遠にわきいでる、魚を釣る男の胸に。希望は永遠にわきいでる、メキシコ人の胸にも。もっとも虐げられた神々の子供だったとしてもだ。おれたちは希望を持ち続けている。ティングレイビーチへやってきて、魚を捕ったり、くつろいでビールを飲んだり、一日を楽しむんだ。貧乏で虐げられている、それでも家族を連れてきて、この池のほとりでくつろぐ。そして物語を聞かせてやる。ドミニクはここにもカジノを建てる計画だ。そしてこのメキシコ人を、今ホームレスが寝起きしている川沿いの森へ追いやるつもりなのだ。

「あなた、今夜はいやにふさぎ込んでるわね」孤独嬢がささやいた。「そうよ、もっと虜になればいいわ。もっと浸って、あなたの心の奥に染み込ませるの。ふさぎ込んで、憂鬱になって、あなたの貧しい人たちのことを考えるのよ。自分たちのバリオから追い出される人たちのことを考えるの。もっと憂鬱になれるでしょう」

孤独嬢がラジオのスイッチに触れると、暗い車内にブルースの歌声が響いた。

ベンは川沿いにゆっくり車を走らせた。リオグランデ川、エル・リオ・グランデ・デル・ノエテ、夢の川、残忍な歴史の川、国境の川、故郷なる川。

孤独嬢がささやいた。「魔女、リオグランデ川の泣き女の時間よ。孤独な心の時間よ」

(15) Anaya, "Aztlán: A Homeland Without Boun-

daries," 230-241, *Aztlán*

(359-360頁)

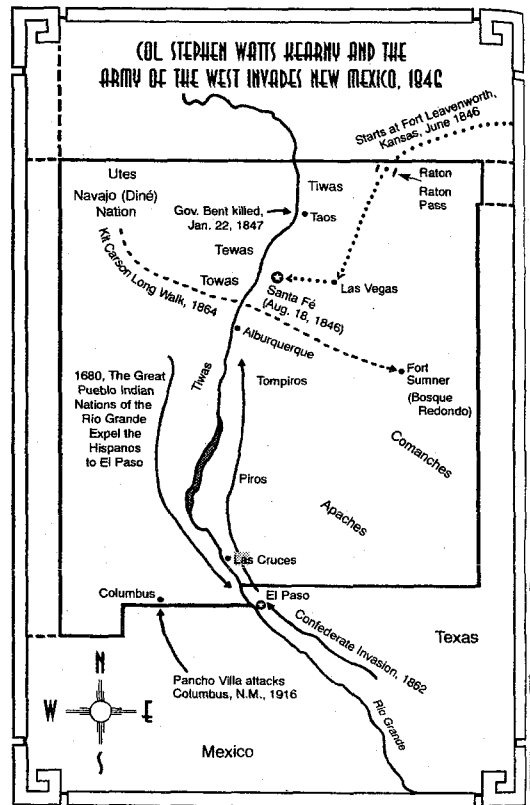
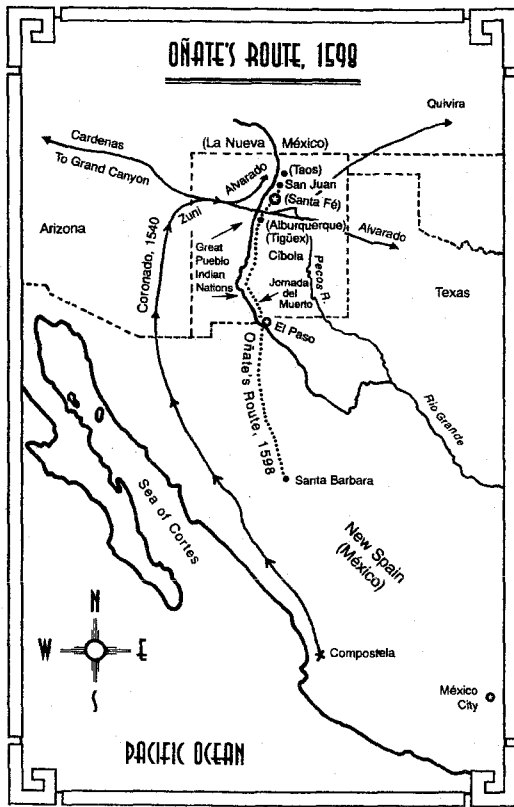
若き日の愛とその愛から生れた息子に父親と名告れない苦悩のなかで、ベンはアストラン到来の〈春〉を作品化していた。〈希望〉は永遠にと願う作家ベンは水と春と太陽を喚起する。アストランの心をもつ言葉は最近作『セラフィーナの物語』(2004)<sup>(16)</sup>にも示されているように、物語を産み出すという女性的使命を果しているのだ。

南西部のサンタフェの物語を紡ぐ『セラフィーナ』は、17世紀サンタフェのプエブロの反乱を背景に知事による処刑と千夜一夜物語を語ることの意味を伝えている。セラフィーナの物語が暴力に対し寛容と理解を説くところに物語としての効用と物語る者の使命を読者(知事と21世紀の我々)に訴えるのと同様に、作家ベンの語りも作品のなかで女性的要素を果たすことに役割があるようだ。作家ベンが産み出す契機を作品に与えているとす

れば、探偵ソニーは男性的行動を体現しつつ、アナヤの命名行為に貢献していると言えよう。前作のシャーロック・ホームズに憧れる弁護士モイセス・リップマンのミステリー好みを転回させ、連帯のために行動するソニーはミステリーを男性的に解決しながら、夏、秋、冬、そして春を生命の危機を乗り越えて迎える。ユリシーズながら、故郷に戻るソニーは夏のソニーではなかった。

ソニー/ユリシーズの冒険の舞台が四季/歴史の二重性を帯びているのは、風景と歴史の回復こそアストランへの帰還という使命感からである。その達成は夏から春への四巻より成り、『シャーマンの冬』中の二葉の歴史地図が示す如く、ソニーの冒険における一年には、四季、太陽の旅路と南西部史の重複により、壮大な物語枠が用意されている。作者の関心を如実に示す黄金に憑かれた人々の歴史とアストランの対比は目覚しい。

黄金に憑かれた者と夢みる者との間で、ニュー



(16) Anaya, *Serafina's Stories*, Univ. of New Mexico

Press, 2004

メキシコ州からニューメキシコ(ヌエボ・メヒコ)、アストラン回復の闘いは壮絶に繰り広げられる。『シアの夏』(1995)、『リオ・グランデの秋』(1996)、『シャーマンの冬』(1999)の三作を経て、『ヘネスの春』(2005)に至り終結した〈四季〉四部作は、アナーヤにとって、作家ベンの成長物語と切り離せない、男性的ソニーの冒険物語であり、ニューメキシコの『ユリシーズ』である。以下、〈春〉という「希望」を語った『アルブルケケ』に至る自伝四作との対比で、そこからの一転回としての〈春〉の意味を、四季四作最後の『ヘネスの春』に沿って考えてみよう。

前掲の歴史地図二葉の間で、1598年から1846年の二世紀半の時の流れの間で、アナーヤは、「私は夢みる 故に私は存在する」(265頁)というソニーの行動原理を物語化した。アントニオにはウルティマが、トルトゥーガにはイスメルダが、クレメンテにはクレピリンが、ベンには孤独嬢がいたように、ソニーにもドン・エリセオ老人が側にいて、その行動の典拠性を支え、その記憶と隣人たちの援助をえて、〈大ガラス〉(Raven)という悪と闘うことができた。〈悲劇の英雄〉ではなく〈庶民の英雄〉として。

大ガラスとの幾度も対決を経て、四作目でやっとリタの待つ家に辿り着く。対決の相手はカトリックの初聖体の少女たちの白いドレスではなく、殺人の跡に黒い羽を残すレイヴンで、探偵ソニーは自らの生命とその生命の根源たる太陽の下の世界を守るべく、幾度もアクション場面を演じた。特に、四作目では、終末的パースペクティブのなかで、9-11後の世界と〈沈黙の春〉のエコロジー的世界とをもう一度歴史の場面に戻し、〈春〉の意味を究めようとした。

レイヴンとドミニクとの対決の最中、ソニーはそのアストランの心を賭け、〈キツネとレイヴン〉の欺瞞の世界で「心」が「盗まれた」感を深くしていく。その時路傍で見つけた亀を拾い上げる。母なる大地と父なる大空の間であって、一匹の亀は「盗まれた心」を回復させる宇宙調和の単純さの意味をもって来る。それはソニー／リタの安住の護符にさえなりうるのだ。

ソニーは亀を大空の山の方にかかげた。するとその生き物の輪郭はサンディア山とそっくりの形だった。申し分なくぴったりだった。山そのものが北に面している亀の生き姿だった。亀との対話を理解した者はその物語を聞くことができた。

老人は物語りたい気分だ。昔父なる大空が母なる大地にやってきて住みつき、父なる大空の重さのため軟らかなへこみができ、そこがリオ・グランデの大きな渓谷になった顛末を老人は語った。生命のあらゆる形のものが神々の結婚から誕生したのだった。聖書の創世記も精子たる雲と大地が交合して出来た生命の形のの前ではかすんでしまった。(178頁)

老人の物語を心に、ソニーは、道端のアルファルファをむしり取り、その上に亀をねかせ、新スペイン(ヌエベエスパーニャ)とニューメキシコが交錯する中を、「絶えず苦痛を伴って大きくなっていった」(180頁)アルパークのレイヴンとの最後の対決場所へと急ぐ。レイヴンとフォックスとドミニクの都市未来(City Future)が支配されている幻影の複雑性は本当に未来都市になってしまっただろうか。

後日、ソニーが学んだことの細部がカフェにやってきた仲間うちで政情を論じた時現れることになる。彼ら、都市、周辺地域は彼らの将来の世代に影響を与えた闘いに巻き込まれた。それはイラクのテロリストたちへの戦争あるいは北朝鮮の脅威だけではなく、世界中の飢えた子供たちに食糧を供する必要、死滅寸前の文化を救う必要があるというものだった。彼らの裏庭でも救う必要はあったのだ。というのも人間の心に潜む専制者の影を見つけるだけでも専制者を倒すことになり、人間には利益になるのだから。

河に棲むヒメハヤは水によって育つトウモロコシと同じ位大事だった。確かに、人々が団結すればすぐわかる筈だ。

しかし春の夜は愛のためと愛のミュージックのためのものだった。リタはソニーの腕のなかで暖かさに包まれ、ソニーは彼女のすやすや

眠る息の音を聞くことができた。彼には、彼女が夢のなか、恐らくリンゴの木に水をやるヘメスのなかにおり、チカが飛び回るコマドリを追っていたことはわかっていた。

春は彼女の夢に戻っていたし、二人が共有する愛それ自体春を約束するものだった。(297頁)

### Ⅲ 〈春〉とチカーノ、チカーノの人々

ソニーの帰還物語結びで、作者は三つの問題を提起した。一つは独裁制の問題であるが、トクヴィルが自由との対比で説いたところ、アナーヤは人間の心の問題として、連帯から孤独へと人を追いやる悪ととらえた。第二は環境問題の視点としてエコロジーの立場からではなく、風景と人との宇宙的調和の神話解釈者としてアナーヤは自然をとらえている。第三点としては、前二者と関連する〈春〉の約束の期待が挙げられる。

端役から太陽のミステリーを解決する探偵ソニーの活躍で、レイヴンから夢を追う「悲劇の主人公」と誂れ、嘲笑されながらも、太陽の子として彼は冒険を遂げ、帰郷し、〈春〉を実現した。だが、正確には、四季の一年が主人公であり、特に、3月21日、春分の日一日を真の主人公とした『ヘメスの春』が端的に示しているように、ソニーの存在はコスモロジーの風景の一点景なのである。

ヘメスの泉に召喚されたソニーの朝から午前、昼、午後、夕方、夜に至る太陽の運行の下で太陽に従う者と抗う者の闘いが展開された。結局、ソニーの帰還を果たした原動力は四季であり、ヘメスの泉を故郷に重ね合わせることを可能にした夢の想像力であった。ホーマー、ダンテ、ソローの伝統下の冒険の焦点は、天敵レイヴンの争いのプロットの中心地、アングロアメリカのハイウェイ66とメキシコのカミノ・レアルが交差するところ、ヘメスの泉と都市アルバカーキが交錯する場であった。レイヴンとの対決を経て、リタの故郷に帰るソニーの手に春を表象する〈亀〉がある。以後故

郷で迎える〈春〉は決して途絶えない。ソニーの確信は太陽の循環を革命によって回復させた者から引継ぎ、次世代へと継承される。

〈春〉の約束はソニーの場合、老人と老木と隣人に囲まれた家族への帰還を果たしたところから連帯というものが〈春〉を確実なものにしていると言えよう。そこで、チカーノ文学にとっての〈春〉の約束の有効性を求めて、若い世代の詩人バカの詩を眺めてみることにする。

アナーヤとバカ、1937年生れのアナーヤから1952年生れのバカの両文学世界を集約する言葉はバカによる「きみが誰であるかをアメリカ教えてもらおうなどと思うな」「Don't depend on America to tell you who you are.」<sup>(17)</sup>であろう。一方、アナーヤの『セラフィーナの物語』には虚構の知事の言葉として次のような寛容と理解を示すものが注意を引く。スペインに帰らぬ決意を固めた彼の心の言葉である。

我々は自分たちに頼らねばならぬ、彼は思った。我々の隣人に頼れ。ここは伝説の地シボラだ。メキシコのアステカ族がアストラン、故郷と呼んだ地だ。今良かれ悪しかれ我々の土地だ。

我々のもの、我々全て、スペイン人、インディオ、クリオール、メスティソ（中略）、我々が自分を何と呼ぼうが。我々は一つの民とならなければならない。ヌエバ・メヒコのラサに。(59-60頁)

スペイン人知事の「寛容と理解」はカトリシズムと歴史とに裏切られた。混血詩人バカにとって頼るものは何もなかった。ニューメキシコと自分以外には。

詩とは内面の旅、生と死の内なる領土への侵入であり、そこでわれわれが探索に費やした勇氣に比例して、われわれを変えるものだ。その旅は、われわれに与えられた風景におい

(17) Jimmy Santiago Baca, *Working in the Dark Reflections of a Poet of the Barrio*, Red Crane

Books, Santa Fe, 1992

てはじまる。生れた場所こそ、われわれの出発点なのだ。ニュー・メキシコ(18)の山々、砂漠、平原とバリオ、河川や用水、畑や庭が、ぼくにこの仕事の手ほどきをしてくれた(19)。

では、内面の旅たる詩と風景とのチカーノ(20)的かわりをバカの『マルティンとサウスヴァレーの瞑想』(21)から拾い、アナーヤのそれと比較してみよう。

バカの自伝詩『マルティン』には、歴史に裏切られない、孤児院での宙ぶらりんの生から帰還の儀式への旅を語るスパングリッシュの響を私たちが読む時、アナーヤからの継承と離陸部分が感ぜられるであろう。「部族を喪失したアパッチ」(de-tribalized Apache)たるマルティンの自己は先祖返りすることによって自己を充たす必要があった。祖母の家から送られてきた孤児院で彼を待ち構えていたのは二つの価値観だった。都市に住むチャベス家のブルジョア家庭と田舎に住むルセーロ家の羊飼いたちのあいだ、聖体拝領の時英語を話す祭壇係の少年とスペイン語を話す平原の放浪児のあいだ、ジョン・ウェインとアパッチのあいだ、さまざまな対立間で彷徨し、やがて、「大地のすべては神聖だ」という内面の歌に促され、ニューメキシコに帰ってくる。ソニーも注目したカライ伝道所に。

おお カライ！ 堆積した砂や小石  
ヌエボ・メヒコの鉱物であるこのぼくに  
形を与えてくれ。

ぼくは暗く赤いアパッチの言葉を学ぼう  
それに風に磨かれた祈りの歌を。  
ぼくを流れる血の数世紀を呼吸して  
真紅に燃え上がるスペイン語による事物の名前を。

あなたの地下世界の息吹をぼくの  
旅に吹きこんでくれ、おお カライ！

ぼくはいつでもよるこんで働く、  
飢えさえしなければそれでいい。  
良き人間であることに失敗せず、  
あれこれがまずまず順調にゆき、  
深く愛してくれる一人の女と出会い、  
強い心をもった兄弟や姉妹と出会い、  
健康な子供たちをもてるなら、それでいい。

おお カライ！

ぼくは約束します——

懸命に働き母なる大地のそばに  
あなたの目によって子供たちを育てることを、  
かれらに事物の古い名前を教え、  
四つの方角に祈りをささげることを。  
逃げ出しはしない。(39-40頁)

かつてのカトリックのミッションは時の侵食を経て今「堆積した砂や小石」に戻っている。その砂と小石と同化する「ヌエボ・メヒコの鉱物／ぼく」は「地下世界の息吹」に祈る。偽善の世界が消え、今ぼくはアメリカの幸福の追求を捨てる。飢えることなく、良き人間として、妻、隣人たち、それに子供の三位一体の生で充足している。ぼくの充足した生と母なる大地は適合し、その調和のなかでぼくは「四つの方角」に祈りをささげている。

すると、カライは男女の祖先の霊、祖父の黒い膚の霊と祖母の灰色の髪(22)の霊として現前し、マルティンと妻と子を守ることになる。祖霊とつながるマルティンの祖国への回帰は大地との同化を契機(23)にしている点、アナーヤのソニーの大木と亀により大地につながるのと同じメカニズムが働いていると言ってよい。

カライへの祈りの後、春、春分の日3月21日の午後、マルティンに樹木の精たる息子が生れる。この辺の詩句の内と外との調和は目覚ましい言葉で横溢している。

3月21日午後、ぼくはガブリエラを

(18) 菅啓次郎前掲書

(19) Baca, *Martin & Meditations on the South*

Valley, A New Directions Book 1987



うちのファルコンに乗せる手助けをした  
ぼくたちは予定通りの道を車で  
産婆さんの家に行った。

収縮 —

息んで息を吸って  
だんだん強く —

ぼくは彼女の額を  
冷たいタオルでぬぐった  
しゃがみこんで  
彼女にテキサス人の冗談をしてやった

のけぞった —

脊椎はちがえ、骨盤ははれた —  
指がシーツをつかんでいる —

女の豊穡の踊り、

(中略)

褐色の赤子がオギャー、オギャー  
ぼくの両手に  
ぼくはそのぬれた頭にキスしわが息子パブロ  
をこの世に迎え入れた。

ぼくは外のポーチに出た  
嵐がおさまったばかりだ —

黒い葉が赤いレンガにへばりついていた  
月がぬれた通りの水たまりのなかで  
円形模様をキラキラさせていた  
ああ、おまえ

おまえは一本の長い緑色の太枝だった  
別の世界では。  
ガブリエラとぼくが愛した時

風、あえぐ風がおまえを略奪した  
おまえはぼくたちのところにやってきた

さあ、さまよえ  
血がつまった気分で  
おまえの母親の腹の空地で  
体を休ませ

母の胸の  
黒い草をむさばれ。

ぼくは内に入り

(中略)

ぼくはおまえと生き物すべてに約束した

ぼくはおまえたちを決して棄て  
ない。(47-49頁)

チカーノのコミュニティ運動がめざした自決の  
文化的ナショナリズムは、オーエンズ・ヴァレリー  
の〈水〉の場合、北米内の弱者対強者という資本  
主義論理が環境運動の時流に乗って一時的に逆転  
させられ、守られたのに対し、大地と人という内  
と外の調和を主張する点で説得力をもつようだ。  
息子を樹木の精に擬する態度は歴史を越え、国境  
を越え、決して「棄てる」ことを許さないところ  
にまで詩人を駆りたてる。

「棄てる」という人間の行為はよって来たところ、  
源／春 (spring) の位相に立つと許されない。  
人間の歴史は「棄てる」愚挙に事欠かなかった。  
南西部においてスペインとアメリカがなした  
こと、それ以前に回帰する必要があるのだ。マー  
ティン／バカの父親は酒に溺れ、自己を「棄て」、  
母親はその父親に凌辱され、「棄て」られた。だ  
から、マーティン／バカはその子を決して「棄て」  
ないと約束をする。これが〈春〉の約束なのだ。  
オーエンズ・バリーには資本によって「棄て」ら  
れた。環境運動で水が守られても先住民の心は癒  
されることはない。1970年代から欧米世界が展開  
したエコロジー運動は、19世紀に本格化した大西  
洋システムの帰結であり、反省であった。ロック  
が17世紀末に警告的に提出したアメリカ像はチカー  
ノ、チカーノたちが夢みた「精神の計画、アスト  
ラン」を認めることを私たちに促しているのでは  
なからうか。

アナーヤからバカへのチカーノ文学にとってエ  
コロジー運動は文明の病への対症療法のようなも  
のであった。〈春〉をめぐるチカーノの作品群は、  
作家ベンや探偵ソニーの四季とマルティンの棄て  
ない思想を読んだ限り、21世紀において、〈春〉  
の意味を考える契機を与えていると言えよう。最  
後に、結びに代えて、バカ／マルティンの『サウ  
ス・ヴァレリーの瞑想』から樹木幻想を原文で掲げ  
ておく。アナーヤよりも力強い詩人の言葉を。

We cut down the elm tree today.  
Ungiving, old ancient tusk of trunk.  
John straddled branches,  
stepping through seed-bud sticks,  
breaking dead limbs. His head was lost  
In branches—  
chainsaw dangling from his waist rope,  
he slowly towed up,  
pulled the cord,  
crackling it snarled saw dust down  
through  
the air.

Limbs crashed down  
with shuddering groans and cracking  
throes,  
hit the ground with dead thuds,  
trembling air they fell through.

Where the tree had stood  
a silver waterfall of sky now poured down.  
Still air.  
Red dusk. I felt I had just killed  
an old man.

\* \* \* \* (94-95頁)

以上、アナーヤの小説群とバカの詩群から故郷アストラランを希求する〈スパングリシュの響〉に触れてきた。文学以外の芸術分野でも“Spanglish”は〈北〉に挑む〈南〉の響を奏でている。この経緯は後日を期すことにして結びに一言つけ加えておきたい。

公的領域で社会が強いる直面と同化に取り組む際、アナーヤやバカ同様、チカーノの芸術家たちは英語と私的領域たる家族のノスタルジアをかき立てるスペイン語とを併用してきた。ここに、両言語間の緊張を示すスパングリシュ世界を展開する必然性の芸術が生じてくる。〈南〉から〈北〉へのまなざしを表現するスパングリシュの響はすぐれて南北アメリカ論なのだ。